

目次

ページ

第1回都市計画研究会	・シェアリングエコノミー(野澤 功平氏、尼子 恵里氏、細川 哲星氏) . . . . .	1
第2回都市計画研究会	・これからの中山間地域の交通環境を考える!! (森山 昌幸氏) . . . . .	2
都市計画シンポジウム	・智頭町のまちづくりを学ぶ(寺谷 節子さん、澤田 廉路氏) . . . . .	3
地域活動助成事業報告	・四国のまちづくりに関する情報交換会&見学会(報告：木下 由梨枝・高塚 創氏) . . . . .	4
広島大学 防災・減災研究センター1周年記念オープンディスカッション		
	・『相乗型豪雨災害』住民・学者・行政が振り返る(報告：田中 貴宏氏) . . . . .	6
ホットコーナー	・—函館旅情—(福馬 晶子氏) . . . . .	7
会員紹介	・荒金 恵太氏、宮崎 保通氏 . . . . .	13
トピックス	・「宮島・土曜講座」の10年(伊藤 雅氏) . . . . .	14
今後の活動計画	. . . . .	15
編集後記	. . . . .	15

第1回 都市計画研究会

シェアリングエコノミー

今年度の第1回都市計画研究会は、シェアリングエコノミーをテーマとして、(公財)中国地域創造研究センターとの共催で以下の通り実施した。

日時/2019年10月4日(金) 13:30~15:50

会場/広島コンベンションホール

2階「メインホール2A」

(広島市東区二葉の里3丁目5-4)

主催/(公財)中国地域創造研究センター

共催/(公社)日本都市学会中国四国支部、

(一社)中国経済連合会、(公財)中国電力技術研究財団、(一社)中国地域ニュービジネス協議会、(独)中小企業基盤整備機構中国本部、

登壇者/講演①：「中国地域におけるシェアリングエコノミー振興方策調査報告」(株式会社山陰合同銀行 地域振興部 産業調査グループ 野澤功平氏)

講演②：「全国に広がるシェアリングの波~国の動きと最新事例紹介~」(内閣官房情報通信技術総合戦略室 シェアリングエコノミー促進室 参事官補佐 尼子恵里氏)

講演③「みんなの暮らしをシェアして旅しよう!」(株式会社ガイアックス TABICA 事業部 地方創生室室長、内閣官房 シェアリングエコノミー 伝道師 細川哲星氏)

参加者/117名



会場の様子

グエコノミーは、地域が持つさまざまな資源を活用することによって地域の課題を解決する新たなビジネスモデルの構築やそれに伴う雇用の創出など、地域の活性化に役立つことが期待されており、さらに新たな需要を掘り起こすと同時に、既存のビジネスを代替し市場に劇的な変化をもたらすと考えられる。

研究会では「中国地域におけるシェアリングエコノミー振興方策調査」について報告があった後、内閣官房情報通信技術戦略室シェアリングエコノミー促進室の尼子氏、シェアリングエコノミー伝道師である細川氏よりシェアリングエコノミーを活用した地方創生の取り組み等について講演があり、参加者からは、具体的な事例による説明でシェアリングエコノミーの今後の展開等について理解できたとの声が寄せられた。

(文責：吉原 俊朗)

インターネットを使って物や技術を共有するシェアリン







ではなく市民全体の課題として共有しともに考えていけるよう 10 ページ以上にわたる特集を組んで配布された。その他、公募によって委員を集めたまちづくり市民会議を開催し、提言に留まらず、有志で実際に行動する市民主導の組織「恵庭まちづくり市民の会」を設立。そこから、様々な市民活動が増え現在に至っていると紹介された。

### (3) 「これからのまちづくりに協働は必要ですか？」

(四国地方整備局 建政部 都市・住宅整備課 真鍋 裕章 氏)



真鍋氏からは、協働の必要が生まれた社会的背景や四国地方整備局で助成したまちづくりの取組事例について紹介がなされた。現在、多くの市町村で協働のまちづくりを推進しているが、国の制度的な背景としては 1998 年 NPO 法や 1999 年の情報公開法、2000 年の地方分権改革等が関係している。市民側はライフスタイルや価値観の多様化、行財政改革の必要に迫られ、このような社会潮流の中、徐々に協働の必要性が高まってきた。現在、行政の抱える課題も山積しており、持続可能なまち・地域をつくるためにも公と民が同じ方向を向いて協力し合うことが不可欠であると説明された。四国地方整備局でもソフト面での施策に力が置かれてきており、各地域での取組を後押ししている。香川県丸亀市の空き家・空き店舗等の遊休不動産のリノベーションまちづくりや、住民や事業者等が主体となり、個性あるエリアへの形成に繋げる東京都や北海道札幌市のエリアノベーション、公園や河川、空き地等の都市空間を活用してイベントや人の集う仕組みをつくる公共空間の活用等、様々な取組事例が紹介される。真鍋氏は、このような各地の取組をみていく中で、①課題を我が事として捉え、継続的に続けられるか、②取組は民意の発意で行われているか、③単なる成功事例の模倣でなく、取組の目的が明確化されているか等が重要なポイントではないかと話された。

### (4) パネルディスカッション

「まちづくりにおける協働をいかに進めるか」



パネルディスカッションでは、五名地区と恵庭市の取組事例を比較整理し、2つの事例からみる成功要因等について議論された。香川大学の原氏は、五名地区は参加の場づくり、暮らしのものさしづくり、金とその循環づくりの3つの場づくりができてきていること、また、計画を大まかに決めその場の状況に合わせて修正する創発戦略をとっており、これらが成功要因でないかと説明される。恵庭市は課題をオープンにし、ともに取り組む人を集め解決するオープンイノベーションではないかと解説された。松良氏は、自身の研究を振り返り、地域の中にキーパーソンは必ずいるが、その人を活かし取組のきっかけを上手くつくる主体は誰でも良く、恵庭市の場合は行政だったと話される。参加者からは、協働を支えるための行政のあり方や役割等の質問がされた。これに対し、松良氏からは協働は信頼関係で成り立つものであり、行政職員としてでなく自身も一市民として住民と一緒に取り組む姿勢が必要であるということが、竹田氏も同様、地域と一緒にあって取り組んでいこうという気持ちを持ち、5年後・10年後を見据えてソフトありきのハードを考えることが重要とそれぞれ返答された。

<まちづくり見学会>15:40~17:25



見学会では、五名里山を守る会の木村氏や五名ふるさとの家の飯村氏らに五名地区の取組について説明頂いた。五名ふるさとの家は、今年の7月にオープンした産直カフェで、地元の人や観光客等の憩いの場となっている。建物は市の公共施設だが、運営は五名活性化協議会が管理委託をうけており、住民総出で切り盛りするお店となっている。シェフの飯村氏は、北海道からの移住者で田舎暮らしに憧れ、移住先を探していた。五名地区を選んだ決め手は「人」とであると話される。木村氏ご夫婦が移住相談の窓口となり、地域の様子もそうだがご夫婦の魅力にも惹かれたとのことであった。

五名地区は交通の便が不便な地域であるが、香川大学の学生も継続的に取組に関わっている。その理由は、やはり「人」であり「楽しそうな雰囲気」に惹かれ学生たちは授業以外にも自ら足を運び活動しているとのこと。

行政依存や誰かに委ねるのではなく、自分たちの地域は自分たちで盛り上げ、不足部分を互いに補い合うことが必要ではないか。また、自分たちも活動を全力で楽しむこと。これが地域やそこに住む人の魅力に繋がっているのではないかと考えさせられた。(文責：木下由梨枝・高塚 創)

(福山市山手学区町内会連合会長)

## ■ 広島大学 防災・減災研究センター 1 周年記念 オープンディスカッション ■■■■■■■■■■

### 『相乗型豪雨災害』住民・学者・行政が振り返る

日時：2019 年 9 月 30 日(月) 13:30~17:00

場所：広島大学東広島キャンパス

(中央図書館ライブラリーホール)

主催：広島大学 防災・減災研究センター

後援：(公社) 砂防学会中四国支部

(公社) 土木学会中国支部

(公社) 日本都市計画学会中国四国支部

広島県医師会

参加者：90 名

#### はじめに

平成 30 年 7 月豪雨による広島県内の甚大な被害を受け、昨年 9 月に、広島大学が防災・減災研究センターを設置した。このセンターの設置から 1 周年という区切りに、オープンディスカッションが開催され、研究者、学生のみならず、地域で活動する防災リーダーや行政関係者等が参加した。会の冒頭で、河原能久氏（広島大学理事・副学長）より、趣旨説明があった。

オープンディスカッションは「都市計画と防災」「自助・共助のための防災教育」「早期避難と避難所の課題」という 3 つのテーマについて、まずコーディネーターから問題提起が行なわれ、それに対して、防災・減災研究センターの研究者から研究の進捗状況、住民代表から地域の取り組みや課題、行政から法整備や規制などの報告があり、その後、議論が行われた。プログラムは以下のとおり。

#### プログラム

##### テーマ 1：都市計画と防災 (50 分)

コーディネーター：藤原 章正（広島大学防災・減災研究センター 教授）

発表者：海堀正博（広島大学防災・減災研究センター 教授）、土田孝（広島大学防災・減災研究センター センター長）、田中貴宏（広島大学防災・減災研究センター 教授）

討論参加者：古川信博（広島県土木局土砂法指定推進担当課長）、牧野美三夫（八本松住民自治協議会防災委員長）

##### テーマ 2：自助・共助のための防災教育 (50 分)

コーディネーター：土田孝（前掲）

発表者：内田龍彦（広島大学防災・減災研究センター 准教授）、後藤秀昭（広島大学防災・減災研究センター 准教授）、山中勝司（東広島市消防局副署長）

討論参加者：河本秀明（広島市危機管理室防災予防課長）、福田直三（広島大学防災・減災研究センター 特任教授）

##### テーマ 3：早期避難と避難所の課題 (50 分)

コーディネーター：海堀正博（前掲）

発表者：大毛宏喜（広島大学病院 副病院長）、坂田桐子（広島大学防災・減災研究センター 教授）

討論参加者：岡田康宏（呉市総務部危機管理課長）、杉原均

#### 「テーマ 1：都市計画と防災」について

ここでは、本会と関係が深い「テーマ 1：都市計画と防災」について、概要報告を行う。

まず、コーディネーターより「平成 26 年 8 月の広島市豪雨災害、平成 30 年 7 月の西日本豪雨災害から私たちが学んだ教訓の一つは、災害被害の危険性がある地域における都市計画の見直しの必要性」との問題提起がなされ、その後、宅地開発を主な対象として 20 年前に制定された土砂災害防止法の活用のあり方、土砂災害のおそれのある区域の指定のあり方、建築物の構造規制のあり方等について、防災・減災研究センターの 3 名の研究者から話題提供がなされた。次に、危機管理を担う行政の活動、住民自治協議会における自主防災活動についての紹介があり、最後に全体討議が行われた。全体討議では、土砂災害が想定されている区域における、建築物構造規制のあり方、地区計画による形態規制の可能性、(敷地毎でなく) 区域全体で土砂災害対応を検討する必要性等について、議論がなされた。

#### おわりに

オープンディスカッションの終わりに、土田孝センター長より会の総括がなされた。都市計画分野においては、課題の整理がなされたという段階で、具体的な方策については、今後、継続的な議論・検討が必要と感じた。

(文責 田中 貴宏)



会場の様子



「テーマ 1：都市計画と防災」の様子

## ■ ホットコーナー ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

### — 函館旅情 —

福馬晶子

令和元年 9 月 20 日～24 日に第 62 回 建築士会全国大会「北海道大会」に出席するため、函館へ旅に出ました。

無茶ぶりでそのホットコーナーに書けとの指令を受けましたので、無茶ながらその始終を旅行をする面と、都市計画の面から紹介したいと思います。

#### 1 千歳市

広島空港から新千歳空港に JAL で飛行しました。海から続く平原の真ん中に千歳空港があるので、少しずつ高度を下げている中で森に突っ込まないかが気ではなかったです。

函館まで時間があつたので、千歳市の市街地に訪れました。

千歳市は、札幌低地帯と勇払原野の間に位置しており、

古来から太平洋側と日本海側をつなぐ交通の要路で、江戸時代にはシコツ越え（千歳越え・ユウフツ越え）の要所であるため、アイヌと和人がサケなどの産物を交易する場となり、明治以降は宿場町として開け、その後山口県から農民団体が入るなどして、開拓が進みました。

千歳川では北海道庁がサケのふ化事業を開始し、北米視察で捕魚車（通称インディアン水車）を導入し、漁業が進められています。現在は、サケのふるさと千歳水族館があり、サケの遡上やインディアン水車を見ることが出来ました。



ちなみに、こちらで美味しかったのはラーメン屋の竜神です。千歳ラーメンは醤油ベースのようですが、トウモロコシを入れ、バターを落とすのはおススメのようで、美味しかったです。有名人が多く来られている店のようで、壁いっぱいサインがありました。



#### 2 函館旨いもの！

さて、大急ぎで新千歳空港に戻り、プロペラ機に乗り、函館空港に降り立ちました。

それから、建築士会の皆さんと合流して、色々函館名物食べまわりましたよ～！



60kg の天然生マグロ解体ショーでマグロの色々な部位を刺身で食べまわり、二次会にマルカン漁業海がき本店で刺し盛りを食べました。刺し盛りの真ん中は、勿論！北海道で生のまま食べられる塩水ウニ！通常、遠くに運ぶためにはミョウバンがかかっており、少し苦みが出ます。北海道では獲ったその日に食べられるため塩水に漬けてあるだけなので、甘味が素晴らしいです。勿論、刺し盛りで、北海道の特産の刺身は制覇！ですね。

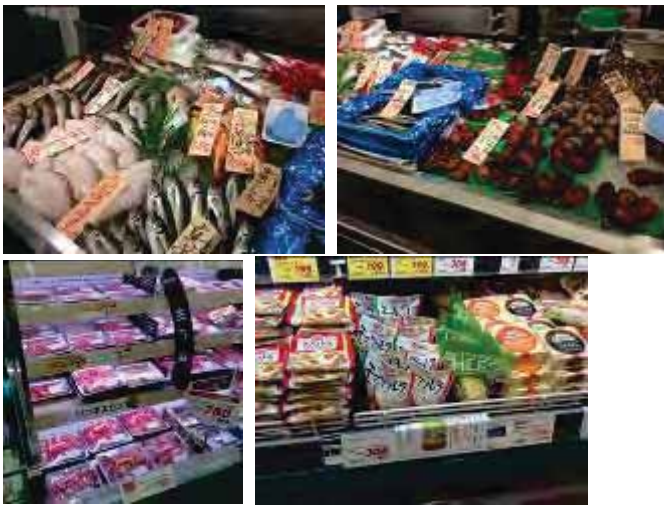


勿論、楽しみは、市場もあります。メジャーなのは駅の脇にある函館朝市ですが、駅から少し離れた自由市場もおススメです。こちら、新鮮な魚などが並んでおり、この時期だと、鮭がずらりと並んでいました。勿論、早どれイクラの浅漬けなどは、生で塩分も少なめなので、イクラの味が楽しめ、醤油をたらして食べるという方式のようです。要冷蔵で新鮮な間の数日しかもたないこの時期だけの味覚ですね。

食堂の一部で御飯が買え、好きなものを好きなだけ載せて海鮮どんぶりなどにできます(・ω・)ゞゲッ！



あっ。下の写真は、函館生協のスーパーの魚売り場の写真でした。生ホッケ、鮭、真カレイ、柳の舞??鱈、筋子！ホヤ、北寄貝、ホタテ！生ラム、様々なチーズ！！今日帰るのなら買って帰りたい！



生ラムは、焼肉屋で食べられます。ヒツジは、色んな種類があり、顔の黒いサフォーク種の生肉は、「ガングロ」と売られていました。冷凍ものと違って、ジューシー！炭火も○！



あかちょうちん高砂通店でハマった、バリキング（酒の名前）の焼酎割。キますよ！



勿論、観光のために、横丁的なものも準備されています。



### 3 函館の都市計画と建築物

おおっと。このままでは食べ飲み歩き紀行になってしまいます。都市計画学会の季刊誌？でそれだけでは怒られてしまうので、都市と建物の話に移行します。

Travel Hakodate で公開中の「About Hakodate - History」の日本語版を転載させていただきます。

函館山は、太古の昔に火山の噴火によってできた島でした。その後、島と半島の間には砂州が形成され、約 3000 年前には、中央部分がくびれた独特の地形「陸繋島（トンボロ）」ができて上がりました。現在の市街地の主要部分はこの砂州の上にあります。

この地に人が住みはじめたのは 5000 年前ごろからといわれます。本州から渡ってきた人々が函館山のふもとなどに住みはじめたのは 14 世紀ごろです。当時は、先住民であるアイヌが優勢で、移住してきた和人と何度も争いがありました。17 世紀になると、北方からロシア人が来て、樺太や千島などでその勢力を増してきます。ロシアとの勢力範囲の確定が、当時の幕府にとっては大きな問題となります。

854（嘉永 7）年、幕府は米国使節ペリーとの間に条約を結んで開国し、箱館（当時の表記）と下田を開港場としました。ペリーは艦隊を率いて箱館にも来航し、「世界最高の良港」と絶賛しました。開港当時の幕府は、外国との応接や防衛上の観点から、箱館を統治する役所を内陸部に移転しました。これが西洋式の稜堡式城郭である五稜郭です。

通商条約の調印に伴い、1859（安政 6）年には横浜・長崎などと並んで開港され、アメリカ・イギリス・フランスなど西欧諸国との貿易が開始されました。その結果、外国商人の往来が盛んになり、西洋文化の



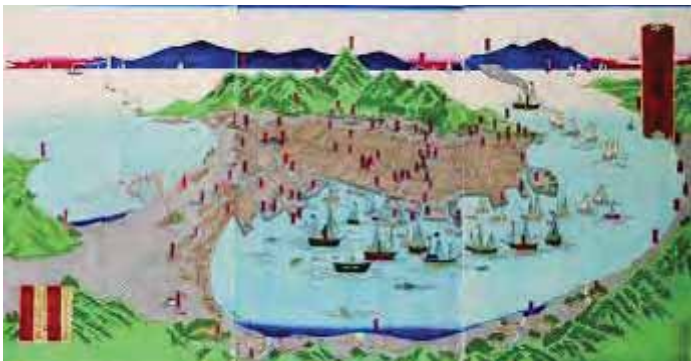


流入がその後の函館の街並みの景観を決定づけることとなります。1868（慶応4/明治元）年、崩壊した江戸幕府の脱走軍と明治新政府軍との戦争が始まりました。旧幕府軍には、元新撰組の土方歳三や幕府の軍事顧問団であったフランス人のブリュネ大尉らも参加。五稜郭を拠点として立てこもりましたが、箱館湾での海戦、市街地での戦闘を経て、新政府軍が勝利しました。



その後、明治政府は函館を北海道開拓の前進基地と位置づけ、青森との間の定期航路開始や、函館港の近代化を推進します。1879（明治12）年には、当時のイギリス領事ユースデンの呼びかけから、日本の都市公園の草分けの函館公園が開設されました。また、1889（明治22）年には、国内で2番目の水道が開設されました。

市内には外国人居留地も設けられ、元町界限にはキリスト教系の女学校や教会、基坂には区役所・警察署・税関、大通り（現在の電車通り）には銀行や大商店が建ち並び、函館山のふもとにはにぎわいをみせました。1908（明治41）年、本州と北海道を結ぶ青函連絡船が開通し、函館は北海道の玄関口となります。また、1920年代には北洋漁業が始まり、大船団の出港地として、函館は未曾有の繁栄をとげます。



1933（昭和8）年には人口が20万人を超え、国内で9番目の大都市になりました。この時期に、函館港に面する一帯には巨大な倉庫群が建ち並びました（現在はショッピングモールの金森赤レンガ倉庫）。函館は海からの風が強いことや、水利の便に乏しかったことから、何度となく大火に見舞われました。当時の市街地の大半が焼失した1878、79（明治11、12）年の大火の後、函館山麓の坂の直線化と拡幅が行われ、その区割りは、今日まで続いています。



1907（明治40）年の大火は、約1000人の死傷者を出し、また町の中心部の大半を焼き尽くしました。しかし、経済的実力を蓄えてきた市民の力で、すみやかな復興が成し遂げられます。旧函館区公会堂、旧相馬邸、旧イギリス領事館、カトリック元町教会、ハリストス正教会など、函館に現存する歴史的建造物の大半は、この大火以降に建てられたものです。



旧北海道庁函館支庁庁舎。1909（明治42）年築の洋風木造2階建て。1991（平成3）年の火事で内部を焼損しましたが、3年後に修復整備されました。正面中央の玄関部の4本の柱と三角形の切妻破風が印象的。道指定有形文化財、伝統的建造物。緑色は復元したもの。

旧開拓使函館市長書籍庫。1880（明治13）年建築とされ、1907（明治40）年に発生した大火の類焼を免れ、庫内にあった行政資料も丈夫なレンガ壁によって守られました。現在は、木の扉と、その内側にある鉄の扉の2重構造で固く閉ざされています。開かずの扉は年に2度、防火点検時にその封印が解かれます。この煉瓦の積み方は、1列に長い辺と短い辺を交互に並べるフランス式です（一部増築分は、1列に長い辺ばかり、次の列に短い辺ばかり、交互に並べ



るイギリス式)。2階壁面の所々にはL字型をしたフックのようなものがあるのに気付くはず。この金具には板を載せたり、コモを下げることで、防水・防寒の効果が期待できるのだそうです。

旧北海道庁函館支庁庁舎の近くの広場に行くと、函館の全体が見下ろせ、奉行所をここに定めたのもこの展望からだと思わせます。



旧相馬家住宅。明治 40 (1907) 年、西部地区の大火で相馬哲平の自宅と店舗も類焼。そのため函館市民雇用と復興の象徴として建築し、邸の内外ともに精巧な彫刻などの意匠で彩られています。平成 30 (2018) 年には、和洋折衷の

品格漂う歴史的建造物として、国から高い価値が認められました。(重要文化財指定は、主屋と土蔵) 旧相馬家住宅の外観は壮麗な和風建築で、洋室の外壁部分のみがグリーンペンキ塗りです。邸内の洋間は、豪華で美しい彫刻や装飾が見事。他の部屋は一級建材を使用した座敷となっており、廊下や欄間などに、卓越した職人の技が光ります。質素儉約を徹底した生活でしたが、冬の寒さをしのぐ様々な創意工夫が見られます。



旧イギリス領事官。函館市旧イギリス領事館は、北海道函館市元町にあるかつてのイギリス領事館である。函館市イギリス領事館は 1859 年に函館市に開設された領事館の中でアメリカ、ロシアに次いで 3 番目に古い。幾度かの大火によって、建てなおされ現在の建物になった。この建物は、1913 年から 1934 年まで領事館として使用されていた。

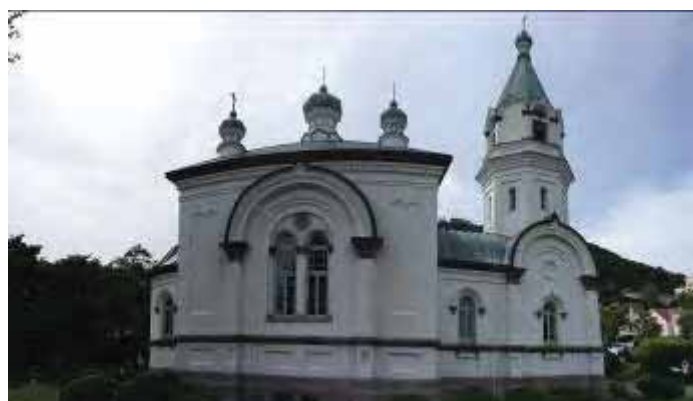
大三坂先のチャチャ登り (チャチャはアイヌ語で「お爺さん」の意。坂が急で、誰もが腰をかかめるため) の上の 3 方には、カトリック教会、フランス教会、イギリス国教会が、仲良く並んで一望できます。



カトリック元町教会。1859 (安政 6) 年にフランス人宣教師メルメ・デ・カシオン氏が箱館入りし、称名寺内に住居を設け、教会堂で外国人のためにミサを行ったり、武士に外国語を教える一方、自らは日本語とアイヌ語を学びました。1867 (慶応 3) に箱館へ来た司祭ムニクー、アンブルステル両氏が二代目聖堂を設けた後、1877 (明治 10) 年に司祭マレン氏がより大きな三代目の聖堂を建立しました。この木造の聖堂は 1907 (明治 40) 年の大火で全焼し、1921 (大正 10) 年の大火でレンガ造りに再建したのもも被害に遭いましたが、焼け残ったレンガ壁の上にモルタルを塗りながら補修し、高さ 33m の大鐘楼が増築され、1923 (大正 12) 年に現在の建物が完成しました。伝統的建造物。



大正 12 年建築、丸井今井呉服店函館支店。その後昭和 45 年に市役所分庁舎になり、平成 19 年からは、地域交流まちづくりセンター。



日本ハリストス正教会は、キリスト教の教会。自治独立が認められている正教会所属教会のひとつである。ハリストスは「キリスト」の意。1907 年 (明治 40 年) の函館大火で焼失した初代聖堂に代わって、1916 年 (大正 5 年)、現在の聖堂が建てられた。1983 年 (昭和 58 年)、聖堂が国の重要文化財に指定される。



函館聖ヨハネ教会 1874 年宣教が開始された英国聖公会 (現、日本聖公会北海道教区) の教会。現在の建物は 1979 年築、茶色の十字形をした屋根が印象的。元町の有名な教会群の一角。四面の白壁に十字架をあしらひ、函館山山頂やロープウェイに搭乗して眺めると、茶色の十字形をした屋根が印象的な建物です。1874 (明治 7) 年に英国人のデニング司祭が函館に上陸し宣教活動を始め、英国聖公会の教会として道内の先駆けとなりました。歴代の牧師らは市内に学校や病院などを開設し、教育、福祉の分野でも多大な功績を残しました。中世紀におけるヨーロッパの教会にならった工法を用いた、近代的なデザインとなっています。



金森赤レンガ倉庫。現在倉庫群が位置しているのは、幕末に造船所や外人居留地があった埋立地である。この地は「地蔵町築島」と呼ばれ、明治時代以降は「船場町」という名に改称された。1863 年 (文久 3 年) に大分県出身の初代渡邊熊四郎が長崎県から箱館に渡り、1869 年 (明治 2 年)、大町に金森森屋洋物店を開業した。これが現在の赤レンガ倉庫の起源となる。背景として、同年に榎本武揚らが率いた旧幕府軍が洋装の官軍に次々と倒されるのを見て洋服の時代を確信したことがあったとされる。函館市内に開拓使出張所が設置された経緯がある。洋物店開業の際、屋号を森屋とした。現在もレンガ建物に描かれている、「曲尺 (かねじゃく)」（“金”にも掛けている）に「森」の字のトレードマークは、この開業の時の商標である。曲尺の記号には律義でまっすぐという意味があり、商売に駆け引きは不要としていた初代らしい屋号である。



1934 (昭和 9) 年の大火は、死者 2000 人以上、市街地の半分以上が罹災しました。大火後の復興計画は、最大幅員 55 メートルの防火帯を市内に縦横に配するという、斬新なものでした。現在、大規模なグリーンベルト (緑地帯) が市街地の骨格を形作っていることが、函館山山頂から確かめられます。



三大夜景と言われていたけれども、過疎で 100 万ドルはないわねえとガイドさんに言われた夜景です。やはり、壮大で美しい。

#### 4 小樽市

他にも函館には大量に明治、大正、昭和初期の建物があり、順次見て歩きましたが、紙面に限られるので、次に訪れた小樽市に移ります。

小樽についたら、暴風雨！傘が瞬時に壊れてしまったた

め、有名な観光地の倉庫群は避け、小樽寿司を食べた後、小樽総合博物館運河館に。そして、小樽市総合博物館へ。

ちゃん垂涎の蒸気機関車などの列車が勢ぞろい、かつ、鉄道が敷いてありその上を 1909 年制作のアイアンホース号というポーター社製の蒸気機関車に乗ることができるのです！！

しかも、重要文化財の転車台で、転車するのです！！

その後、重要文化財の機関車庫に可愛く収まるのです！！

走る季節が決まっているので、ぜひご確認の上、こころゆくま乗るなり眺めるなり、煙と戯れるなり、機関の音や転車台の音をガッチャンガッチャン愛おしむなり、していただければ！と思います。これは良い！

いやあ、ホント、書きたい放題で失礼いたしました。

是非、千歳、函館、小樽に行かれた時の参考にしていただければと思います。







